Charles Tripp,

A History of Iraq.

Cambridge: Cambridge University Press, 2000, xvii+311pp.

大野元裕

I

これまでに，数多くのイラクの近現代史に関する著作・論文が発行されてきた。これらの多くの作品は，必ずといってよいほど，イラク国家の求心性とイラク「国民」が有する様々なモザイク模様のアイデンティティに触れてきた。しかしながら，イラク国家とその中に「存在」する様々なエンティティとの関係が，いかなる意味を持ち，意識され，歴史的な与件に関わってきたかについては，必ずしも十分な研究がなされてきたとは言い難いように思われる。したがって，この観点に鑑みてイラクの政治史を歴史として再構成していくか，イラク近現代史の各政権の基盤とそれを取り巻く環境をいかに捉えていくかについても，包括的な取り組みはなされてこなかったように思われる。様々なエンティティの存在を前提としたイラク国家の求心性とそれをもたらすための政府の統治の装置は，イラクの近現代史を通じて同じではないように思われ，この問題を明らかにするためには，それぞれの政権の間に共通する傾向と異なる特性が必ずしも明確に把握されてこなかった。

本書は，ロンドン大学東洋アフリカ研究所において長年イラク研究に携わってきたトリップ博士の著作で，イラク独立前夜の社会・政治状況から現代までを取り上げたものである。この作品においてトリップ博士は，イラクの近現代史におけるそれぞれの政権ごとに区分けし，あたかもミッシェル・フーコーが言うところの「考古学的な断絶」を強調する手法で，各政権の特徴を明確にしていく。そこにおいてイラクの各政権は，支配装置と各エンティティのアイデンティティの関係，アラブ・ナショナリズムとの関わりを軸として，それぞれに異なるものとして著述される。その一方で同博士は，この断絶を超越した共通の傾向をも議論していくのである。

II

本書は，以下の通り時代を追った章立てとなっている。

序
第1章　オスマーン朝の州としてのバクダード，バスラ，モースル
第2章　英国統治
第3章　ハーシム王朝　1932-41
第4章　ハーシム王朝　1941-58
第5章　共和制　1958-68
第6章　バアス党とサッダーム・フセインの統治

序章においてトリップ博士は，イラクの歴史においては，中央において求心力となる「イラク国民」を創設する国家と，民衆の間に共有され，時として変質していったいくつものグループが存在することを指摘する。その上で，イラクの支配者とこれらのグループが異質な状態にあり，それがあいまいな関係を築いてきたことを指摘し，この関係のあいまいさをイラクの歴史の特徴として指摘する。さらにトリップ博士は，イラク政府の統治を説明する上で重要な要素として，国家と個々のグループの「パトロン＝クライアント関係」の存在，石油の富および暴力の支配を挙げる。

第1章においては，現在のイラクにほぼ該当するオスマーン朝下の3つの州における16～17世紀の状況を取り上げている。この時期のイラクは，独特の統治のシステムを敷くオスマーン朝下の「中央」と「地方」の力関係の綱引きの中で，その後の来るべきイラク独立に向けた様々な要素が現れ，あるいはそれが抑圧された時期として著される。これらの要素とは，それぞれの州がかつてより有していた特殊性，すなわち，土地封建制度，アラブ系部族や商人

が織り成す有機的構造，モースル(Mosul)州における半ば独立したクルド人エンティティ，バグダード州とバスラ(Basra)州におけるシーア派の独自性とペルシャとの関わり等であり，もう一方では，新たに覚醒されたURUBA（アラブ性）や，イラク独立を主張する政治活動として取り上げられる。

第2章は，英国の委任統治下のイラクを取り上げている。この時期は，イラク国家の基礎が模索・確立された時期であり，同時に，様々な紛争の種が蒔かれた時期として著されている。前者は，イラクが領土的に規定され，英国の利益を保護するために，ハーシム王制，スンニー派，土地封建制に基づく社会システム等が活用され，軍が組織されたこと，さらには，この新たなシステムの中で利益を享受する層が出現したことに代表される。後者は，イラク内での政治運動の萌芽，「パトロン＝クライアント関係」の中で差別された層の出現，国家の求心性に反発したアイデンティティの再発見等である。

第3章は，ファイサル(Faisal) 1世の即位から1941年の英国の軍事介入までを扱っている。この時期は，アラブ民族主義とイラク国民国家間の対立，シーア派の運動の活発化と分裂，知識層と都市ブルジョア階級の連帯と封建制という対立項がより明確になってきたイラクにおいて，「イラク国家第一主義」(Iraq First) を追求する政府が人的繋がりと軍に依存した時期でもあった。エンティティとしてのイラクの確立が先行したにもかかわらず，この時期に至っても国家を単位とした単一のイラク社会は成熟に至らず，イラクのアイデンティティはあいまいなままに放置された。

第4章は，1941年に英軍の介入により軍人支配が退けられた後から王制が打倒されるまでを対象としている。この時期，政府の中で大きな力を行使したヌーリー・サイード（Nuri al-Sa 'id）は限られた人的関係に基づき支配を確立し，複数の政党の活動を認めたが，徐々により独裁的な体制に移行していった。これに対し，軍の青年将校団，封建領主，シーア内改革派，汎アラブ主義者，共産党等が反発を強め，この結果，軍部および汎アラブ主義者が革命を達成し，イラク王制は終わりを告げる。

第5章はカーセム（'Abd al-Karim Qasim）ならびにアーレフ（'Abd al-Salam 'Arif）兄弟政権下の共和国イラクを対象としている。カーセム大統領は軍部を抑えつつ独裁制を敷き，イラク内政を優先させる政策を採っていく。カーセムはイラク国家第一主義を強く打ち出し，国内各セクトの宥和，国家収入の貧困層への再分配等の政策を進めたが，その一方でセクト主義を強く拒否し，イスラーム政党やクルド政党を力で押さえつけていく。またカーセムは共産党との連携を強めるが，その一方で汎アラブ主義者，大規模封建領主の不満を煽っていく。カーセムの後に政権を握ったアーレフは軍との連携を強め，汎アラブ主義的傾向を強く打ち出す一方で部族主義的な紐帯を重んじ，保守層を取り込むが，シーア派およびクルドとの対決姿勢を打ち出し，バアス党を抑圧していく。その後，アブドゥル・ラフマン('Abd al-Rahman 'Arif)が政権を継ぐと，軍の不満も高まり，軍若手将校とバアス党による1968年革命を招くこととなる。

第6章は，1968年のバアス党の政権掌握から現在までを対象としている。新政権においてはそれまでの共和国政権と同様に指導者個人が大きく際立つ存在となり，その指導者の人脈と軍，治安機関に重きが置かれた。新政権は，イラク北西部のスンニー派の人的・部族的ネットワークを基礎とした。ここにおいて，バクル（Ahmad Hasan al-Bakr）大統領とサッダーム（Saddam Husain）副大統領にとりバアス党は，指導者が構築する政権安定に向けたパトロン関係の延長に過ぎなかった。サッダーム・フセインが大統領に就任した後は，バアス党の教条よりも大統領への忠誠・服従が優先された。同様にこの政権は，経済・政治・土地システムを強力な中央集権下に統合し，そこから外れるものに対しては力の政策で封じ込めを行った。シーア派，クルド等に対する政策も同様に，圧倒的な力を背景に，政府の中央集権システムの中へ取り込み，それがかなわない場合には抑圧の対象とされていった。

III

本書が「考古学的な」分断を乗り越えて共通に見られる特徴として取り上げているもののひとつに，「イラク国民」を成立させる社会的な背景が未成熟な点がある。イラク政府および為政者達は，特に後世になるにつれて強力な中央集権国家を形成してきたが，イラク領土に居住する人々は，様々な民族・宗教・イデオロギーに基づいたグループへの帰属意識を持ち続け，「イラク国民」意識を社会的に構成するには至らなかった。

歴代のイラク政権は，イラク民族の共通の運命を強調し「イラク第一主義」を唱えてきたが，その一方で，民族，宗教・宗派，部族，経済的単位等，様々なグループの存在を前提とし，利用する政策を採ってきた。その代表的な政策は，トリップ博士が強調する歴代のイラク政権に共通の「パトロン＝クライアント関係」である。イラク政府は，政権を支える層への特恵的待遇を通じ，このような関係を築いた。厚遇されるクライアントは，時には北西部のスンニー派アラブ系部族出身者であり，時には封建領主であり，また時には共産党であった。しかしここで重要なことは，各政権が，特定のグループを他のグループよりも差別的に優遇することにより，これらのグループによる政権への支持を確固たるものとし，あるいは，双方のグループ間の敵意を煽ることを通じて，政権の安定を図ってきたことにある。

近代的な意味での「国家」がナショナリズムの要請に基づき形成されるものであるとすれば，イラクにおけるナショナリズムは未成熟なままにあるように思われる。ドイツの政治社会学者ゲルナーによれば，ナショナリズムは，国民が共有すべきアイデンティティ（意思）ならびに中央集権国家により再生産される同質な国民の間に共有される文化，さらには正統的な暴力を社会の中で独占する国家による強制力が必要となる［ゲルナー 2000］。この論点に依拠してトリップ博士が指摘する重要な3つの支配装置の要素を検討する場合，前述の通り，イラクは中央集権国家を構成し，石油の富を背景に政府の作り上げた神話を再生産するシステムを構築してきた。また，強制力をもたらすことが可能な暴力を独占し，しばしばそれを行使してきた。しかし，イラク政府がイラク・ナショナリズムを提唱し，中央集権支配を通じて共有文化を再生産し，強制力を行使しようとしても，イラク政府の統治の大きな特徴である「パトロン＝クライアント関係」はかかる努力を阻害してきたのである。つまり，特定のグループの差別化は，同質な国民の間に共有される文化と相容れることのない異質性をもたらすことになるのである。特に，トリップ博士が強調するように，イラクの歴史の中で大部分の国民がその声を無視されてきたのであれば，特定のグループの差別化は社会の中で強烈な個性を発揮するわけで，その分だけ，文化再生産のメカニズムは阻害され，ナショナリズムは未熟なままに放置されてきたのである。このような背景とともに，イラクを構成する様々なグループは自らのアイデンティティを維持させていったのである。

「考古学的な」歴史の分断の中で連続する統治の方法が見出せる一方で，それぞれの政権ごとの重要かつ代表的な変数は，「パトロン＝クライアント関係」の中で政府と特別な関係を築いてきたクライアントである。それは時に，たとえば軍部が強く支持するアラブ民族主義に配慮する必要性に基づく教条的な理由，地方を掌握するための封建領主厚遇，あるいは，たとえばソ連との関係を重視する上での共産党厚遇等の外政的な理由等，それぞれの政権が重要と考える要素により異なってきた。

イラクの近現代史は安定した政権の推移というよりも，革命，衝突，離反，デモ，抑圧，逮捕の繰り返しの側面を有してきた。トリップ博士は，このような出来事及び変化の羅列である「イラクの歴史」の背景をクライアントの状況に沿って説明しようと試みている。イラク政府が直面した不安定な出来事の多くについて，「パトロン＝クライアント関係」の崩壊，変化，もしくは，このような関係に反発する他のクライアント・グループの立場に遠因を求めるのである。

トリップ博士は，クライアント・グループになり得るそれぞれのグループのあり方は必ずしも常に同

じではないと指摘する。政治的・社会的・経済的な環境にしたがい，これらのグループは変化し，あるいは，異なる意味の中で捉えられていったのである。たとえば，汎アラブ主義は，一部のシーア派にとっては，最終的にスンニー派との間の相違をなくすものとして捉えられ，その一方で，他のシーア派にとっては，シーア派の宗教指導者の権威を否定し，シーア派の大多数の状況を悲惨なものへと導くものとして捉えられたのである。このように，政治的な環境の変化にしたがい，シーア派というグルーピング，あるいはその意味は変化していったのである。このような変化は，部族や封建土地領主制度に基づく地方のグルーピングにもあてはまる。また時として政権は，このようなグループのあり方の変化を意図的に利用した。その典型は，政府がクルド民族運動の分裂を利用した歴史的経緯に看取される。

本書は，必ずしもイラクの歴史を鳥瞰的に説明するものではないが，これまで議論したように，イラクの近現代史を扱う場合に大きな問題であり，ある意味で「イラクの歴史」そのものであるモザイク上のグループと政権の関係に意識的に焦点をあてた興味深い作品である。

文献リスト

ゲルナー，アーネスト 2000．『民族とナショナリズム』（加藤節監訳）岩波書店．

（元シリア日本国大使館書記官）